

## アーサー・コンドルセ・オコナーの政治経済 思想: アイルランド・ブリテン・フランス

後藤, 浩子 / GOTO, Hiroko

---

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

科学研究費助成事業 (科学研究費補助金) 研究成果報告書

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

4

(発行年 / Year)

2012-05

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 25 日現在

機関番号：32675  
 研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2009～2011  
 課題番号：21530188  
 研究課題名（和文）アーサー・コンドルセ・オコナーの政治経済思想：アイルランド・ブリテン・フランス  
 研究課題名（英文）The Political and Economic Thought of Arthur Condorcet O’ Connor：Ireland, Great Britain, and France  
 研究代表者  
 後藤 浩子（GOTO HIROKO）  
 法政大学・経済学部・教授  
 研究者番号：40328901

研究成果の概要（和文）：

本研究では、Château du Bignon (Loiret, France)に残る A・コンドルセ・オコナーの未公開の手稿“Memoirs”のトランスクリプションとデータ入力という史料編集作業を行った。また、理論的作業の面では、18 世紀末ブリテン思想史研究の分析概念を整理し、「ラディカリズム」を有用性と利益の語彙による法権利の語彙の置き換えとして定義しなおすことで、T. ペインやオコナーの思想の特徴を映し出すことができる新たな思想分類の一カテゴリーを提示した。

研究成果の概要（英文）：

The transcription and data input of the manuscripts of Arthur Condorcet O’Connor, which have been kept in Château du Bignon (Loiret, France), was completed by the archival work of this research project. Besides, the theoretical research cleared up obscurities and problems in the hitherto usages of the principal analytical categories which have been employed by research into eighteenth-century British social thought, by redefinition of the analytical category “radicalism”. This “radicalism” consists in the substitution of the vocabulary of utility for that of jurisprudence, which is typical of the thoughts of Thomas Paine and Arthur O’Connor.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済学、経済学説・経済思想

キーワード：社会思想史・アイルランド・啓蒙

1. 研究開始当初の背景

アーサー・コンドルセ・オコナーは、1790 年よりアイルランド庶民院議員となり、C.J. フォックス等、当時のブリテンのウィッグ急

進派との交友関係を築き、1795 年以降ユナイテッド・アイリッシュメンのリーダーとなったが、1798 年蜂起直前に逮捕され、1807 年国外追放処分となりフランスに渡った。90

年代にはアダム・スミスの経済学説を基にした経済時論の執筆活動も行っていたオコナーは、『道徳感情論』仏訳者であり『国富論』仏訳も手がけていたコンドルセ未亡人ソフィアの信頼を得て、亡きコンドルセの娘と結婚し、1852年にフランスで亡くなった。オコナーの居館であった Château du Bignonには、オコナーの思想研究、そしてユナイテッド・アイリッシュメン研究にとって極めて貴重な史料となる“Memoirs”と題した手稿がのこされていることは知られていたが、オコナーの子孫であるラ・トゥール・ドゥ・パン (la Tour de Pin)家の個人所有史料であり、なおかつ館が極めてアクセスしにくい場所にあることによって、これまでその手稿を閲覧できた歴史研究者は3名にすぎなかった。しかも、その閲覧の結果は彼らの著作中での部分的引用に反映されているだけなので、その手稿の全内容はほとんど明らかになっていなかった。全手稿の分量も、閲覧許可をとれるか否かも確定しない状態であったが、2009年度に手稿所有者への閲覧許可申請等の準備を始め、2010、2011年度に予定されていた在外研究を全手稿の閲覧とトランスクリプションに充てれば、全資料に基づいたオコナーの思想研究が可能になると見積もり、研究計画を立てた。

## 2. 研究の目的

(1) 史料編集作業として、オコナーの未公開の手稿“Memoirs”の全頁をトランスクリプションし、電子ファイル化すること。これは、将来的に“Memoirs”手稿を活字化し公開するための予備作業となる。

(2) 思想史研究の理論的作業として、“Memoirs”を参照することによって、オコナーの人脈、個人史、思想とその形成過程を明らかにすること。特に、彼がどのようにA. スミスの経済学を受容し、それを当時の現状分析と政治活動の方針決定に繁栄させているかを、アイルランド・ブリテン・フランスと変遷した彼のライフステージとともに、明らかにすること。

(3) 歴史学研究として、“Memoirs”を参照することによって、ユナイテッド・アイリッシュ運動に関係する新たな情報を集めること。特に秘密結社化した後のユナイテッド・アイリッシュ運動にどのようなプロセスでオコナーは関与し始めたのか、アルスター地方、レンスター地方のどのメンバーとの連携があったのかなど、組織の状況やフランスとの交渉の内容に関しては、オコナーしか知りえない事柄であるので、極めて重要である。

## 3. 研究の方法

### (1)オコナーの全著作の閲覧と収集

- ①Château du Bignonの手稿閲覧  
“Memoirs”手稿と他の書簡類。
- ②出版物のコピーの収集  
オコナーの全パンフレット類を19世紀のパリ出版のものも含め The Goldsmiths'-Kress Microfilm collection より入手する。
- ③オコナーの編集し寄稿した新聞 “The Press”の閲覧  
所蔵している National Library of Ireland に赴く。

### (2)オコナーに関わる書簡の閲覧

ブリテンの代表的ウィッグである C.J.f フォックスとの間で交わされた書簡を British Library で閲覧し、オコナーの最も親密な友人であった Sir Francis Burdett の書簡を Oxford の Bodleian Library で閲覧する。

### (3)思想分析と思想史的位置づけ

- ①分析カテゴリーの再定義  
多義的で曖昧なまま18世紀末のブリテン思想分析で使用されてきた「ラディカリズム」を「共和主義」「自由主義」等の分析カテゴリーとの対比において明確に再定義する作業を行う。これによって有用性と利益の語彙による法権利の語彙の置き換えという形で、政治経済学が社会思想に与えた影響を、掬い取ることができる分析カテゴリーを準備する。

- ②オコナー思想の分析

オコナーの思想を、以下の観点から分析する。

・スミスやヒューム等スコットランド啓蒙の言説が1780年代のアイルランドでどのように受容され、ブリテン帝国論あるいは帝国批判へと応用されたか。

・バークに典型的なブリテン国制論に依拠するマンスター (オコナーの出身地) の急進主義と、スコットランド長老派の共和主義思想の影響が濃いアルスターの急進主義思想の橋渡しがオコナーによってどのようになされたのか。

・19世紀ブリテン帝国をオコナーはフランスという思想空間からどのように批判したのか。

## 4. 研究成果

### (1) 手稿“Memoirs”のトランスクリプション

本研究を開始した初年度にフランスの Château du Bignon を訪問し、手稿の閲覧許可を願い出た。Château の管理者であるダボヴィル(d'Aboville)夫人が対応してくれたが、手稿が彼女の他3名の姉妹の共同所有になっており、Château での閲覧は許可するが、

コピーは不可、パソコンへの全手稿の入力は許可するが、電子データ化されたもの的一般公開や他の研究者への無断の授与は不可という条件つきであった。手稿の閲覧と入力作業のために、Châteauの図書室を借りることができた。

“Memoirs”手稿は、A3の紙を半分に折り、裏表両面使用でA3一枚で4頁分として使用され書き込まれている。2001年に初めてオコナーの伝記を書いたヘイムズ(Jane Hayter Hames)が、手稿で言及されている内容の年代に従って番号付けした1から5までのFolioに分類されている。各Folioの頁数は、Folio1-pp.16、Folio2-pp.81、Folio3-pp.235、Folio4-pp.132、Folio5-pp.362、計826頁である。

手稿には、ピリオド、カンマがあまり打たれておらず、構文を把握し読解しながらの入力にかなり時間を要し、最終年度の3月ようやくひととおり完了した。ただ、文章の区切りや、誤読、ミスタイプをチェックする必要があったので、内容上重要なFolio5は、英文校閲者に再確認が必要な箇所を点検してもらった。

今後、全体を再確認し、完成度を高めた後に、紙媒体の形でChâteauに保管し、そこで活字化されたものを閲覧できるようにする予定である。

## (2) “Memoirs”が執筆された状況

“Memoirs”は、ユナイテッド・アイリッシュメンの設立者であり、蜂起の際の軍事的援助についてフランス政府との長期的な交渉者であったセオバルト・ウルフ・トーン(Theobald Wolfe Tone)の最初の著作集であり、彼の息子のウィリアム・トーン(William Tone)が編集した*Life of Theobald Tone* (1826)の出版が一つの切っ掛けとなり、執筆されたものと考えられる。1826年から1828年の間に、オコナーは、自分の長男である同名のアルチュール(Arthur)に自らの信条と経歴を伝えるため、アルチュールに呼びかけ、伝える形式で“Memoirs”を執筆し始めた。トーンの著作集のように、自らの死後に息子がそれを出版してくれることを期待してのことであった。しかし、1829年、長男は病死してしまう。オコナーは、その後、幾度か手稿に手を加え、書き足ししている。1843年、ユナイテッド・アイリッシュメンの元メンバーの足跡を調査していた歴史家マッデン(Madden)に、「私は私の回想録に従事しているが、貴方が書くであろうことはその回想録を妨げないだろう。私の回想録は連合(the Union)の最初から最後まで私が知っているすべてを含むことになるだろう。この問題について書きたいすべての人間にとって十分なほど広い領域と余地がある。」

(T.C.D., Ms 873, no.742)と書き送っていることから、それは明らかである。内容上の重複から、Folio2はFolio5の修正稿であると思われるが、そこでも息子のアルチュールへの呼びかけの形式は変更されていない。手稿のFolio2のp.7は、ブルボン王朝についての記述であり、未完のまま終わっている一文の終わりに「(not finished (3 Feb 1852))」と赤で書き込みがある。この部分に加筆することなく、オコナーは1852年4月25日に亡くなった。

## (3) “Memoirs”の内容

“Memoirs”において、オコナーはフランスに移住して以降の出来事については一切言及していない。したがって、ナポレオンや王政復古に関する彼の見解と評価は、公刊されている著作『ラファイエットへの手紙』『モノポリー』第1巻～第3巻を参照する他ない。フランス移住後のオコナーについては、今回の研究では十分に時間をかけて取り組むことができなかった。

ただ、アイルランドとブリテン時代に関しては、幾つかの注目すべき事柄に彼は言及している。オコナーやユナイテッド・アイリッシュメンに関する先行研究における“Memoirs”からの引用などではまだ取り上げられていない点について、以下にそれを列挙する。

### ①当時のブリテン・アイルランドの政治構造に対する批判

- E. バーク(Burke)との交流と、彼から知らされた政治の実情——国王ジョージ3世の助言者として、初代リヴァプール伯チャールズ・ジェンキンソン(Charles Jenkinson, 1st Earl of Liverpool)が背後で国王の政治的決定を牛耳っている。
- 1795年のアイルランド総督フィッツウィリアム(FitzWilliam)の更迭は、長年得てきたアイルランドでの長官職をこの新総督によって剥奪されたベレスフォード(Beresford)に援助を求められたジェンキンソンが背後から国王に指図したことによって出された決定である、とオコナーは理解。さらにこのような指図に対して、国家的「利益」擁護の観点から異議申し立てできない首相ピットに対して失望。(F5, 139)
- オコナーは、カトリックの更なる参政権を認める法案に賛成の立場で議会演説をしようともより準備していた。ただ、総督フィッツウィリアムの更迭という情勢の急激な変化に激昂すると同時に、アイルランドでのベレスフォード支配を崩すことの困難さを痛感したので、その議会演説は衣着せずアイルランド議

会での寡頭制を批判する激しい長時間のものとなった。

## ② ユナイテッド・アイリッシュメンの内部問題

- ・カトリックのメンバーとの不和（新たに組織に入ったオコナーが直ぐにレンスター執行部のトップに立つことに対する反感や、蜂起のための兵士のリクルートの際にカトリック側の非協力的態度をめぐって、特にマコーミック (McCormick) とマクネヴェン (McNeven) の名が挙げられている。
- ・フランスとの交渉ネットワークの不統一 (Wolfe Tone とカトリック陣営/オコナーとの分断)。フランス側もアイルランド人活動家を意図的に分断。
- ・ヴァレンタイン・ロウレス (Valentine Lawless, 2<sup>nd</sup>. Lord Cloncurry) との関係—1798年のフランス渡航計画の際にカトリック司祭オキグレイ (O'Coigly) と同行するよう突然依頼してきたのはロウレスであり、オキグレイとはほとんど面識がなかったこと。オコナーの渡航はユナイテッド・アイリッシュメンの執行部 (the executive) しか知りえない機密事項であったのに、ロウレスにそれが洩れている点に、オコナーは激怒している。レンスター執行部のカトリックのメンバーが、同じカトリック陣営に属するロウレスに洩らしたに違いないとオコナーは推測しているが、これによって、逆にロウレスは執行部メンバーではなかったということがわかる。
- ・アルスターの組織との関係 —ベルファストの機関紙「ノーザン・スター」 (the *Northern Star*) の編集者、シムズ兄弟 (William and Robert Simms)、サミュエル・ニルソン (Sammuel Neilson)、ウィリアム・テネット (William Tennet) の政治思想の賞賛。「私は北部執行部 (the northern executive) を構成する人々の全面的信頼を得るのにどんな困難も感じなかった。」 (F5, p.186)。但し、1796年以降、組織の要であった北部執行部構成員が誰かは具体的に言及されていない。

## ③ ブリテンのラディカル諸勢力との関係

- ・ロンドン通信協会、トマス・ハーディ (Thomas Hardy) らとの関係の否認。(これは、*British Radicalism and the French revolution 1789-1815* での H.T. Dickinson によるオコナーの位置づけに対する反証となる)
- ・ウィッグ党、フォックス (C.J. Fox)、シェリダン (R. Sheridan)、グレイ (C. Grey)、ホイットブレッド (S. Whitbread) との親交の深さの強調。
- ・フランシス・バーデット (Sir Francis

Burdett) との親交— (1817年 Lord Cloncurry とアイルランドで接触、1830年以降のバーデット、ジェレミー・ベンサム (Jeremy Bentham)、オCONNEL (O'Connel) 関係)

## ④ フランスとの交渉

- ・オシュ将軍 (General Hoche) との会談と合意した内容—アメリカに赴きジョージ・ワシントン (George Washington) とともに戦ったフランス軍中将ジャン＝バティスト・ド・ロシャンボー (Jean-Baptiste de Rochambeau) との関係との類比—オシュ率いるフランス艦隊はゴルウェーに到着し、武器を義勇軍に提供し、彼らはダブリンを目指す、他方、オコナー率いるアルスターの義勇軍も蜂起し、ダブリンを目指す。
- ・蜂起後の政策—アイルランドでの貿易の独占権をフランスが握るのはフランスにむしろ不利益になる、と政治経済学に基づいてオシュを説得。

## ⑤ 1797年の選挙と投獄

- ・フランス側からのアイルランド遠征の連絡をマクネヴェンが握りつぶしたこと。
- ・治安判事に対抗して、アルスターにおける義勇軍への影響力を確保。
- ・ダブリン城への収監と暗殺未遂。

但し、各記述内容の裏づけをとる史料批判はまだ完了していない。

## (3) 思想分析と思想史的位置づけ

### ① 分析カテゴリーの整理

18世紀末ブリテンの社会思想を扱った従来の代表的研究がどのような意味で「ラディカル」「ラディカリズム」を使用しているかを分析した結果、かなりの混乱が見られることがわかった。そして、この混乱が、ブリテン思想史において「功利主義」がベンサムやミルの原理の採用を意味するものとしてかなり狭義に使用されているために、トマス・ペイン (Thomas Paine) に代表されるような、「法権利の語彙」を「有用性と利益の語彙」に置き換える新しい思潮をカテゴライズする用語がないことから生じていることを明らかにした。これまで、ポーコックの提唱してきたディスコースの分析では「シヴィック・ヒューマニズムの語彙」(共和主義)と「市民法学の語彙」(自由主義)の二つが分析カテゴリーであったが、これに「有用性と利益の語彙」を加え、「ラディカリズム」をこの思潮を表わすタームとして定義することで、18世紀末のブリテン思想をより適切に分析しうるカテゴリーを作った。さらに、M. フーコーを援用して、「権利の主体」とのズレを常に随伴する「利益の主体」こそが、この

ラディカリズムの本質的要素であることを明らかにした。以上の成果は拙稿“Political Economy in Late Eighteenth-century British Radicalism: A re-examination of the analytical categories” (*Kyoto Economic Review*, vol.80)に発表される予定である。

#### ②オコナー思想の分析

研究初年度にアイルランドの経済思想史を W.ペティを基点として再考し、アイルランド在住時代のオコナーの思想的環境を見直す作業を行った。アイルランド地主として「改良と経営」を目指した結果、ペティは、「植民事業とは何か」を経済パラダイムにおいて定義しなおし、経済を基底においた上で政治制度を考察する政治経済学的視点を確立することができたが、この視点こそ、M・フーコーが「統治性」概念のもとに探究してきた新しい知のあり方であり、これは、その後 18 世紀を通してオコナーをはじめアングロ・アイリッシュ層に共有されていく「統治の知」の原型となった。以上の研究成果は、「アイルランド植民と統治理性：W.ペティと政治経済学の開始」(『法政大学経済志林』80 巻 1 号)に発表される予定である。さらに、研究発表「アーサー・オコナーの政治経済学」においてオコナーの初期のパンフレットや演説の内容を分析し、そこに植民地統治の知としての政治経済学の視点がいかに反映されているかを示した。また、彼のディスコースを構成しているのは「有用性と利益の語彙」であり、この意味では彼の思想は、彼がコーク県行政長官であり、またアイルランド庶民院議員として与党側に立っていた時(1791 年)も、1797 年にアントリムで選挙演説している時も、一貫して「ラディカリズム」なのであり、変化はしていない。この点は「A. オコナーの急進主義：1791-1794 年」(『エール (アイルランド研究)』30 巻)において明らかにした。

#### (4)今後の課題

手稿のトランスクリプションと入力作業に多くの時間を取られたことによって、1806 年以降のフランスにおけるオコナーの研究については、今回の研究期間内では完了することができなかった。“Memoirs”が僅かながら伝えるのは、フランスでの王政復古による貴族や僧侶の復権に対するオコナーの失望である。オコナー研究を完成させるには、彼のフランスでの生活と、当地で執筆された著作の分析が是非とも必要なので、最終年度の研究計画にはこの課題の遂行と、アイルランドの学会でのその成果発表を載せていたが、残念ながら達成できなかった。これは今後の課題としたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

①後藤浩子、“Political Economy in Late Eighteenth-century British Radicalism: A re-examination of the analytical categories”, *Kyoto Economic Review*, 査読有、No. 80, 2012, 印刷中。

②後藤浩子、アイルランド植民と統治理性：W.ペティと政治経済学の開始、査読無、『法政大学経済志林』80 巻 1 号、2012、印刷中。

③後藤浩子、アーサー・オコナーの急進主義：1791-1794 年、査読有、エール (アイルランド研究)、30 巻、2010、pp. 38-55.

[学会発表] (計 1 件)

①後藤浩子、アーサー・オコナーの政治経済学、日本アイルランド協会アイルランド研究年次大会、2009 年 11 月 29 日、帝塚山大学東生駒キャンパス

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

後藤 浩子 (GOTO HIROKO)  
法政大学・経済学部・教授  
研究者番号：40328901

##### (2) 研究分担者

なし

##### (3) 連携研究者

なし